

# 記号論的転回の進展過程

—— 記号論立脚のトランスモダン論の提起を目指して ——

大橋 昭一

## I. はじめに—近年における記号論の概況

近年、種々の分野で記号論的な分析・考察が進展している。記号論は、スイスのソシュール (de Saussure, F.) とアメリカのパーズ (Peirce, C. S.) により始められたものであるが、記号論の入門的論説を書いているチャンドラー (Chandler, D.) によると、記号論が文系の研究の主要な分野として一般に認められたのは 1960 年代以降といわれる (C1, p.2)。

かつて一世を風靡したアクターネットワーク理論でも、近年、記号論的分析との関連を緊密にする傾向が強まっており、他の分野、例えば経済理論でも記号論的分析を図る試みがおきている (この点について詳しくは Q6 をみられたい)。なかでもアクターネットワーク理論と記号論との関連は、関連分野の理論的前進に大きくかわるものであり、これにより記号論的研究はそれ自体において大きく前進し、かつ、実に多様なものとなっている。

こうした事情もあるのか、記号論の代表的論者の一人であるリーウヴェン (van Leeuwen, T.) は、2005 年において「記号論の著作では『記号論とは何か』からスタートするものが多い」(L3, p.1) と述べている。これに従えば、本稿でも前提とする記号論の概要について冒頭で明らかにしておくべきものと思われるが、現在の記号論で主要部分を成すところの、一般に古典的な構造主義的理論といわれるところの、例えばソシュールのシニフィアン (signifiant; signifier) とシニフィエ (signifié; signified) とによる 2 要素的枠組み、パーズの実質上この両者に対象 (object) を加えた 3 要素的枠組み、グレマス (Greimas, A. J.: 文献 G2) の 4 要素的枠組み等については別拙稿 (Q6.7) で説明しているので、それを参照願いたい。本稿はこれに次の諸点を付け加えるものである。

すなわち、記号論では、以上の古典的な構造主義的理論に対し、その後次のような新しい展開がみられることである。第 1 に、ホリデイ (Halliday, K.) により唱えられている「機能主義的 (functionalist) 記号論」や、モリス (Morris, C. W.) により提起されている「行動主義的 (behaviorist) 記号論」などがある (文献 M3)。

このうち機能主義的記号論についてみると、提唱者であるホリデイは、古典的な構造主義的な考え方を“形式主義的なもの (formalist)”として批判し、出来上がった記号や言語の形ではなくて、ディスコースを重視すべきであるとする。ディスコースでは 1 つの用語や記号に複数の意味が込められている場合が多いが、ディスコースの機能的場面ではそれぞれの状況に適した意味が捉えられるものと考えられる。そこで機能主義的記号論では習慣的な考え方やディス

コース・パターンが重視されるものとなり、記号論の流れでみると、全体的にはパース的な考え方にたつものとされる。他方、行動主義的記号論の立場にたつモリスでは、重点が、記号の定義などではなく、記号の認識過程に置かれる。

次に述べておきたいことは、以上とは一応区別されたものとして、「社会的記号論」や「物的性記号論」などがあることである。このうち、後者の物的性記号論については、大要を別拙稿 (Q5.8) で考察しているので、詳しくはそれを見ていただきたい。ここでは両者がどのようなものかについて、本稿で前提としているところを簡潔に述べておきたい。

社会的記号論は、社会には種々な記号モード (semiotic mode: 例えば音楽上の記号) があるから、記号現象は、あくまでも、それらの統合的関連のもとに実践されているものであることを強調するところに特色がある。ちなみに近年の代表的論者であるリーウヴェンは、記号論で通常単に記号とよばれているものについて、それは正しい呼び方ではないので、その代わりに「記号資源 (semiotic resources)」とよぶべきであると主張している (L3, p.2)。

他方、物的性記号論は、アクターネットワーク理論の提唱者の一人ロー (Law, J.: 文献L2) を中心に提起されたもので、記号の元となる対象は物質的なものを根源とするから、記号現象においても、それを例えば単なるまなざし (gaze) や解釈 (interpretation) といったレベルの問題とみるのではなく、あくまでも物質的なものに土台があると理解されるべきことを強調する。

この点について本稿筆者としては、記号は本来社会的なものであることがとにかく留意されるべきであると考え。例えば交通信号で、赤色は停止信号を意味する記号であるが、これは全く社会的に決められているものであり、自然的に赤色であることとは全く無関係である。このことは、記号認知行動には社会的歪みがありうることを意味しているが、こうした社会的歪みを和らげ、いわば平準化・同等化の作用をするものに、マキアーネル (MacCannell, D.) によると、宗教、資本主義的生産様式、現代ツーリズムの3者がある (M1, p.119: 訳書145頁)。

ここで本稿テーマとの関係もあり、記号の形態について一言しておきたい。記号には多様な形態があり、前記のパースによると、この世には59,049種もある。パースは、これを根本的特性の同様性に基づき整理すると、アイコン (icon)、インデックス (index)、シンボル (symbol) の3根本形態に集約されるとしている (C2 訳書10頁)。

アイコンは絵や写真などをいい、実在の対象を模倣しているもので、通常「類像」と訳される。インデックスは、火事の時の煙のように、実在対象の一部や因果関係にある別物をいい、通常「指標」と訳される。シンボルは、例えば交通標識のように、実在対象と直接的関係性がなく、社会的に認められているだけの慣習的なものである。これはソシュール説でシニフィアン・シニフィエンの関係は恣意なものとされるのと概ね同様のもので、通常「象徴」と訳される。

本稿は、以上のうえにたって最近における記号論の動向を考察するものであるが、その際、近年における記号論的分析の盛行に対し大きなきっかけとなったものの1つに、記号論的転回 (semiotic turn) といわれるものがあることに着目し、直接的にはそれに焦点を置くものである。

この記号論的転回について初期にその意義を論じたものに、ルノワール (Lenoir, T.) の 1994 年の論考 (文献 L4) がある。まずこれにより、この転回の糸口になった論点がどのようなものであったかを明らかにする。なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

## II. 1990 年代中葉における記号論の状況

ルノワールは、当時 (1990 年代中葉まで) におけるいわゆる「記号論的転回」が本質的にどのようなものであろうかを問わんとする。まず、アクターネットワーク理論の代表的論者であるラトゥールについて、直接的にはアクリヒ (Akrich, M.) / ラトゥールの連名論考 (A1) を対象に、次のような批判を提起している。

周知のように、ラトゥール理論の根本は、人的アクターと物的アクターとを同価値的なものとして並置するところに、すなわちラトゥールのいう「均斉化の一般化 (generalized symmetry)」にあるが、まずこの点についてルノワールは、それはグレマスの記号論四角形に通じるものであり、記号論的には特段に強い意義があるものではないとする (L4, p.124)。

さらにラトゥール説で問題であるのは、その分析の焦点が物事の進行過程、実践状況 (performance) に置かれていることであるという。ラトゥールらの論説には確かに実践は能力 (competence) を前提とするという記述があるが (cited in L4, p.124)、しかしそれは、進行過程の分析上の 1 視点として言及されているだけである。本稿筆者のみるところでも、過程の解明こそが目的というのはラトゥール説の徹底した考え方であった (Ω4)。

もっともラトゥール自身はグレマスの所論をいち早く知り、ラトゥールの代表的著作の 1 つといってい 2005 年の著 (L1) において、「アクターネットワーク理論は、半分がガーフィンケル (Garfinkel, H.; 文献 G1)、半分がグレマスに帰せられるものであり、…記号論の古典的成果はグレマス／クールテ (Courtès, J.) 編の 1982 年の用語辞典 (G3) に実に見事に集約されている」(L1, pp. 54-55) と述べている。

これからもわかるように、総括的にいえばルノワールは、記号論としてはグレマスの所論をよしとし、その観点から当時のいわゆる記号論的転回を論じている。というよりは、記号論的転回といわれるものは、もともとグレマスの所論を契機としておきたものであり、それだけグレマスの所論は画期的なものであったことを証するものであった、ということを実証せんとするものであったといえる。

ルノワールは、グレマスの所論について、まず総論的に「その記号論四角形は、(現在社会では事柄が) 二極対立的な (binary oppositions) ものとなっていることに対応し、現実をそうしたものとしてとらえるのに適したものであり、階級対立 (class conflict) を土台とする完結したイデオロギー・システムをモデル的に表示するに実に有用なものである」(L4, p.128) と評している。

この際留意されるべきことは、グレマスの記号論、すなわち記号論四角形で認知の対象とされているものは、記号という現象面においてではあるが、現実の事柄そのものであることである（正確には意味論（semantics）的レベルのもの（M2, pp.13,113））。従ってこの場合何よりも次の点が留意されるべきである。それは、「グレマスの記号論四角形」の4つの立脚点のうち、土台となるのは（「四角形」上辺の）対立関係（contrary）といわれるものであるが、これは具体的には例えば〔生〕と〔死〕、あるいは〔資本〕と〔労働〕を示すものであり、それは現実にある二者対立性に立脚する弁証法的矛盾を示すものであることである。

この点はルノワールが、グレマスの所論について、ヘーゲル弁証法と同様な弁証法的論理に基礎をおくものであると位置づけているところにはっきり示されている（L4, p.129）。またこの点についてカチリウス＝ボイドスツン（Katilius-Boydston, M.）も、グレマスの所論では現実はもともと二重的対抗（binary oppositions）のものとしてとらえられていると特徴づけている（K1, p.2）。つまり、グレマスの記号論四角形は哲学的基礎が二極対立的な弁証法にある。

ただし、グレマス説の評価は必ずしも一定したものではない。上記のように高く評価するものがある一方、例えばビーベ（Beebe, B.: 文献B）のように、現代記号論としてはソーシャルとパースのみを挙げ、グレマスを全く無視しているものもある。

ルノワール自身は最後に、「記号論的転回は、それがあつた特定の（望ましい）方向をとるならば、将来の科学研究に対し輝かしいルートを示すものである」と述べている。本稿ではそれがその後どのように推移したかを考察する。そこで次に、記号論のいわば古典的前提となっている、ソーシャルのシニフィアンとシニフィエとの二重性論を超克し、これを「記号論的イデオロギー（semiotic ideology）」としていわば一本化する主張を提起したキーネ（Keane, W.）の2003年の論考（文献K2）を取り上げる。

### Ⅲ. 記号論的イデオロギー論の提起

キーネの所論は、大要、次の諸点を問題意識とし、立脚点としている。第1にまず、ソーシャルにみられるところの二重性論は、西欧科学のいわば誤った常識となつてきたものであると批判し、否定する。これは例えば、一般的には「精神（spirit）」対「物質（matter）」、記号論では「シンボリックアプローチ」対「物質論的（materialist）アプローチ」、政治経済（学）における現代経済のとらえ方では「グローバルな実体力（material force）としての経済」対「ローカル的な意味的な（local meaning）経済」との対比として論じられてきたものである。

しかもキーネによると、こうした二重性あるいは二極志向的な枠組みの主張は、ソーシャル以後の近代的な記号論では、二重の二極志向的なものとなっている。すなわちそれはキーネによると、記号論でみると典型的には、一方において「抽象的な記号システム」対「具体的な記号システム」という二極志向性があるとともに、他方では「人間（もしくは人的なもの：person）」

対「事物（もしくは物的なもの：thing）」の二極志向性があるという二重に構成されたものとなっていて、キーンは、こうした二極志向性は今日では妥当性がないというのである。

こうした二極志向性論批判が、ソシュールなどの所論、なかんずくグレマスの四角形論を念頭に置いたものであることは明らかである。そしてキーンは一方では、こうした二極志向性についての考え方はすでにギリシャ哲学に淵源がある古いものであり、かつ現代社会が資本主義的社会である限りやむを得ず続くものであることを認めてはいるが、しかしキーンは、他方では、こうした二極志向的な考え方は無用なものであり、「われわれはこれらの二極志向性を新しい（グレマスの）形で単純に再生産するようなことがあってはならない」（K2, p.410：カッコ内は大橋のもの、以下同様）と強く批判・否定している。

さらにここで指摘しておきたい第2点は、こうした批判においてキーンが立脚点としているのが、記号論の今一人の創始者であるパースの所説であることである。このことはキーンが、その論考の要約の冒頭において、自らの所論が「パース記号論の諸局面を中心に論を進めるもの」と宣しているところにはっきり示されているが、この場合キーンは、総括的にも、ソシュール説に賛同できないとして、パース説が、ソシュール説とは区別されたものとして取り上げられるべきものであることを力説する（K2, p.413）。

この点についてキーンは、「多くの因果論志向的な論者では共通してソシュールの記号学（semiology）とパース的な記号論（semiotics）とを混同し、共に観念論（idealism）とみる見解をとっているが、実に笑うべきこと（ironic）である」（K2, p.413）と述べ、正しくはパースはリアリズムにたつものであって、パース説では現実の対象が記号現象の1要素として入っている。ソシュール説のようにそれが記号現象から除外されているのではない、と強調している、

そこでキーンは、パース説では記号現象においてシニフィアンとシニフィエ以外に現実の対象（object）にも考察が向けられるものとなるから、記号の根本的3形態であるアイコン、インデックス、シンボルについて理論的基礎づけを行いうるものになるとする。すなわち、（多くの論者では）シンボルの基礎は（ソシュール説に基づき）社会的な恣意的な慣例（arbitrary social conventions）的なものとされているが、しかしキーンによると、パース説にたつと、それも社会的な論理的因果関係のダイナミクス（social dynamics of logical-causal relations）に基礎を置くものとしてとらえられるものとなる。これがキーンのいう「記号論的イデオロギー」の土台をなすのである。

関連してヘーゲルについていえば、パースによって次のように批判が提起されていることが、すなわち、ヘーゲルでは外面（現象面）における衝突（outward clash）が全くといっていいほど無視されていると批判されていることが、キーンにより引用、紹介されている（cited in K2, p.413）。

それ故キーンでは、「記号を読むこと（sign reading）から、記号論的イデオロギーの樹立へ転回すること」が理論的スローガンになる。

では、キーンのいう記号論的イデオロギーとは何をいうものか。それは、一言でいえば、事柄・事物にはもともとシンボルの機能があり、例えば人間は心のなかにあるもの（意志）を他



人にわかってもらうために、それをなんらかの事物（行為を含む）で示し、例えばプレゼントなどの形で他人に伝えようとするものであることをいう。それは、まず第1に、パースの記号論などでいうシンボル概念を発展させたものである。

この点についてキーネは、一方ではパースが「アイコンとインデックスは、それ自体としては、何物も主張するものではない (assert nothing)」と述べているところを引用するとともに、他方では同じくパースが、シンボルについては「一定の条件がある場合には、間違いなく、何物かを経験させるものであり、その意味でも現実的事実 (real fact) そのものである」と書いているところを引用している (cited in K2, pp.419-420)。

総括的にいえば、記号論的イデオロギーとは、事物の記号を単にサインだけのものとみるのではなく、記号をもって主体の意志の“対象化 (objectification)”と考えるものである。この観点からいえば、アイコン性とインデックス性とは、独自の存在としては、“メタレベル (meta-level) の記号現象”という位置づけのものとなる。

以上のうえにたってキーネは、こうした記号論的イデオロギー、すなわち意志の対象化が有効な経済体制を、“代表的経済 (representational economy)”とよんでいる。それが実際には資本主義的経済とよばれるものであることを、既述のようにキーネは否定しているのではないが、経済領域そして人間生活における二者矛盾性（少なくともその存在意義）はこれを否定し、それはあくまでも主体と客体との一体的な存在としてとらえられるべきものであるというのである。

キーネの所説は、理論史的にみれば、主体と客体との一体的把握を主張するものであり、アクターネットワーク理論における人的アクターと物的アクターとの同列的一体的扱いの主張に通じるものであって、その限りでは“アクターネットワーク理論立脚の記号論”，あるいは“アクターネットワーク理論と記号論との合体”の1種とみることができる。

そこで次に、アクターネットワーク理論の代表的論者であるラトゥールの所論について、記号論的観点から論究している、ヘスタッカー (Hostaker, R.) の2005年の論考 (文献H) をレビューする。ラトゥール説について本稿では、ルノワールによる批判を既述ですでに考察している。しかしこれは、理論史的には1990年代中葉時点のものである。本稿次項で課題とするものは、このことを前提として、こうしたラトゥール説に代表されるアクターネットワーク理論についての批判的考察がその後どのように進められてきたかを明らかにすることである。それ故本稿では、ヘスタッカーの所論のうちでも記号論に関する部分が主たる対象となる。

#### Ⅳ. ラトゥールのアクターネットワーク理論と記号論

ヘスタッカーによると、ラトゥールの所論では、初期の科学研究論以来、記号論が基本的な理論的ツールとなってきた。この点についてヘスタッカーは、その論考の冒頭で、「良く知られているように、ラトゥールの『科学の人類学 (anthropology of science)』は、かなりの程度記号

理論の影響を受けたものであった」と述べている。この場合ラトウール説の中心をなすアクタント (actant) やトランスレーション (translation) といった基本的用語もすべて記号論に起源をおくものであって、エイジェンシー理論はグレマスの所論と対比させて論じられてきたと特徴づけられるものであった。

ヘスタッカーによるラトウール説批判も、ある意味で当然のことながら、まず第1に、ラトウール説の根本的前提である人的アクターと物的アクターとの同価値性・同列性、すなわち全般的均斉化の主張についての批判から出発している。この点についてヘスタッカーは、これまでこれは多くの批判を招いてきたものであることを指摘したうえで、「このことを概念化するためにラトウールは、言語の自律性 (autonomy of language) を絶対的なものとしてきたのであり、このことがアクターネットワーク理論と記号論とを合一させたところの、(ラトウールが自らの学問の名称としているところの) “General Associology (協会など連合体すなわち association もしくは assembly の学問)” という名称の学問への道を拓いたのである」としている (H, p.6)。ヘスタッカーからみれば、こうしたことはラトウールの記号論傾倒を示す象徴的な事柄である。

ラトウール説の今1つの大きな根本的な理論的前提は、トランスレーションの概念であるが、これについてヘスタッカーは、「この概念はラトウールの考える『科学の人類学』を短縮して要約したものであり、… (しかしそれはラトウールのいう) 行為の集約と分散 (convergence and divergence) を論じるには限界があるものである。というのは、(ラトウールのいう) それは、要するにケーススタディに終始するものであるから、事柄の実体を人的もしくは物的なアクターに起因するもの、つまりアクターの能力に起因するものとは考えることができないものである」(H, p.6)、というよりは、そうした能力を追究することをしないで、事柄の成り行きをトレースするだけのものとなっているためである。しかもそのようにすることをラトウール自身が自ら積極的に主張しているものである、というのである。

このうえにたってヘスタッカーは、特に記号論に関して、次の諸点をラトウール説に対する全般的な批判点として挙げている。

第1に、前記の言語の自律性について、その必要性あるいは適用性がラトウール説では狭く考えられていることである。これは基本的にはラトウール説では、結局、人的および物的なアクターのいわば活動の自由が優先される、あるいは優先されるべきものと考えられるようにされているためである。すなわちラトウール説では、「そのようにすること (言語の自律性を強く考えること) は、アクター自身の領域に介入することにある」(H, p.6) と解されるものとなっているところに起因がある。それ故ヘスタッカーによれば、「このようにしてのみ全般的均斉化は可能とされているのであり、ラトウールのいう “General Associology” が有効性をもつのは、この平面においてだけである」ということになる。

第2に、ラトウール説では“非還元性”や、“実験に耐えたもののみが真実という『力の実験性 (trials of strength)』の命題”が、科学・学問の基準とされていることである。これは特に初

期ラトゥール説が立脚していた実験室的研究 (laboratory studies) にみられたもので、ラトゥールの構成主義的理論 (constructivism) の土台をなすものといわれるが、これについてヘスタッカーは、「それはグレマスの記号論の根本的考え方とそれほど離れているものではない」と評するとともに、ラトゥールでは結局、「記号論とアクターネットワーク理論とが1つのものとなって、ラトゥールのいう“Associology”を形成するものとなっているがために、次のようなことが、すなわち、ある所ではアクターネットワーク理論で説明されている事柄が、別の所では記号論で説明されているということがおきている」(H, p.7) と論じている。

第3に、ただしこの場合、グレマス記号論の立場からみて問題であるのは、ラトゥールが過程の分析に重点を置くものとすることによって、能力 (コンピテンス) の把握において有効な理論を持ちえないものとなっていることである。これは、端的には、ナラティブ (narrative) の理解、従って言説 (utterance) の理解において欠けることがあるという結果になっている。通常の記号論でいえば、このことは言説には“行為 (doing) の言説”と“状態 (state) の言説”があり、パフォーマンスのナラティブでは両者が一体となって現われると説明されるものである。

例えば「Aさんは赤いドレスを買った」という場合、それには「買った」という行為とともに、「買って持っている」という状態が含意されるとともに、そのドレスを「買う資力 (コンピテンス) を持っていた」ということも含意されており、コンピテンスがパフォーマンス以前にあることが示されるものとなっている。ところが「ラトゥール説では、このことは全く逆にとらえられ、パフォーマンスがあって、(その結果として) コンピテンスがある」と理解されるものとなっている。故に「この点におけるラトゥールの記号論使用は少々オーソドックスではない」と批判されるものとなっている。

これらをふまえてヘスタッカーは、「ラトゥールの記号論立脚的アプローチには限界があるが、それは記号論そのものに起因するものではなくて、あくまでもラトゥールの適用方法に起因するものである。…それはラトゥールがケーススタディという限定されたコンテクストを前提とし、それに囚われているためである。これは (ケーススタディなどラトゥール説に特有なもの) 以外の他の方法を使用すれば避けられるものであり、かつそれは、記号論的世界のなかでもなしうることができるものである」(H, p.22) と結んでいる。このことは、本稿筆者としては、何よりも今日のようなグローバルな情報社会では聞くべきところが大きいと思われる。このような時代にはケーススタディの持つ意義は限定的にならざるをえないのではないか。ヘスタッカーの所論はこのことを強く教えている。

以上のようなヘスタッカーのアクターネットワーク理論批判に対する反論的論考と位置づけられうるものに、本稿冒頭で紹介したローの2007年の論考 (L2) がある。そこでローは、アクターネットワーク理論は、少なくとも今日では物的性記号論とよんでもいいものであるが、土台となるものはケーススタディであり、その積み重ねのうえに理論構築を図るものであって、自然科学の諸方法に類似のものであると力説している。ローのこの論考については別拙稿 (Q5) で



取り上げているので、それを参照願いたい。

本稿としては次に、記号論的転回を実質的には「アイコン的転回 (iconic turn)」にとらえ、その意義を論究しているフェンク (Fenk, A.) の 2008 年の論考 (文献 F) を取り上げる。この論考でフェンクが中心的に論じているのは、情報通信のデジタル化 (digital turn) によって画像は鮮明度が高まることにより、画像的畫面 (pictorial material) が量的に増加しているだけではなく、画面の人工的修正・加工の程度が向上するため、画面の人工的な修正・操作の可能性が大となり、画像画面のもつ質的意義、すなわち記号論的意義が変化している。こうしたことは、記号論的にはどのように理解されるべきものかということである。

## V. インデックス的類似性の提起

フェンクは、この論考の冒頭で、メディアというものは、単なる通信の手段ではない。それは (物事の) 認識上の役割からいえば、もともと (人間の) 記憶装置 (メモリ) のうちでは外部のかつ補助的なものであるが、近年におけるウェブシステムやデジタル化による通信技術の進歩・発展により、こうした外部の装置であるものが、ますます個人対応的なものとなり、“内部化されたもの” になったと位置づけ、こうした「アイコン的もしくは画像的な転回はデジタル的転回によって促進されるとともに、他方では画像的転回はデジタル的転回を刺激し加速している。そしてこれによって画像的畫面の提供が増加し、それがわれわれ人間の画像的リテラシー、すなわち画像の認識・使用の仕方を変化させている」(F, p.27) と述べ、このアイコン的転回の意義を解明することが現今の必須の課題になっていると提起する。

その際フェンクが問題意識とすることは、さしあたり直接的には、こうした画像的畫面の増加が、そうでない画面すなわち文字の画面 (text) や音楽の提供を犠牲にしたうえで進んでいるのではないか、ということである。フェンクによるとこうした問題では、「何物かを創造する (create) 技術や過程」と、「何物かを蓄えたり、再生産したり、複製したりするような技術や過程」とを識別することが肝要であって、近年では結局後者の技術や過程が異常に進展しており、それは、記号論的に一言でいえば、「インデックス的類似性 (indexical similarity)」の考え方にたつものであるというのである。

記号論におけるインデックス、アイコン、シンボルの意味については、本稿冒頭ですでに一言している。結論を先に述べると、フェンクの所論は、今日のアイコン的転回では、そのなかでもインデックスの意義が高いものとなっていることを主張するものである。このことを主張するためにフェンクは、まず、パースの所論に拠って、理論史的根拠を明らかにしようとするが、フェンクのみるところ、少なくともパース記号論ではもともと、記号の究極的根本的形態にインデックス、アイコン、シンボルの3者があるとされることによって、記号という用語 (概念) に誤解が生じる恐れがあるから、それを厳密に規定すること (delimiting) を必要とするものであった。

それ故理論的には、例えばインデックス性は次のようなものとして、すなわち記号の単なる参照的システムとして記号世界にあるだけのものではなくて、もっと広く考えて、そもそもそれには（事柄を）認識する土台的な原則という広い機能があるものとしてとらえることが望ましいというのである（F, p.33）。このことをフェンクは、インデックスはもはや参照的なもの（reference）ではなく、推論的なもの（inferential）となることであると表現している。

インデックス的類似性とは何かについて、フェンクは、例えば人間の実物の姿に対していえば、その影、実物の顔面に対していえば鏡に映っている像などをいうものとしているが、フェンクはインデックス的類似性が近年のデジタル化によって記号現象、とりわけ情報通信現象において中枢的役割を担うものとなっており、近年のいわゆる新しいメディアによりそれが加速されていることを力説するのである。つまり、こうした通信技術の進歩は、フェンクによれば、記号化やアイコン化の進展ではなく、インデックス的類似性の進展以外の何物でもない形で進んでいるものである。

この点についてのフェンクの問題意識は、今日のデジタル的映写技術のもとでは、画面そのものが加工されたものとなり、変造されたものとなる点の指摘にある。例えば人物の姿や背景なども容易に取り替えられ、変造される。デジタル技術を駆使した変造や作り直し（remake）では、単にデータの記録や保存が行われるだけではなく、修正・加工も行われる。というよりはデジタル化によってそうした修正・加工が容易になり、かつ徹底したものとなっている。

これがフェンクのいうインデックス的類似性の進展であり、アイコン的転回とかデジタル化的転回といわれるものの真の姿はここにあると、フェンクはいうのである。ただしこれは、あくまでも画像の変造・操作の問題であるので、インデックスの面においてとらえられるものである。アイコンは今や変造、操作され、いわば事実でないものとなっているから、アイコンというレベルではなく、インデックスというレベルで論じられる必要があるというのである。

IT 技術の進歩により写真等の画像も容易に修正・操作が可能になっているというフェンクの指摘は、いわゆる記号論的転回の1つの決着点を示したものとみられる。本稿では最後に、さしあたり現在社会体制のあり方に関連させてこうした記号論的転回、端的にはアイコン的転回の社会的意義について本稿筆者の見解を述べ、結語とする。

## VI. おわりに—トランスモダンの記号論の展開を求めて

まず指摘しておきたいことは、フェンクらが論じている情報の操作性（manipulation）の問題は、もともと情報・記号に内在し、その特性に根源があることである。すでに別稿（2016）で指摘しているように、情報の出し手がエンコードするものと、受け手がデコードにより表象するものとは同一とは限らない。故に情報はすでにここにおいて操作可能なものである。フェンクが特に主張しているのは、写真などの画像はもともとは現実をそのまま写したものとして登場し、

そうしたものとして認識されてきたものであるが、とりわけデジタル化によって操作可能性の程度が高くなったということである。

いうまでもなく、このことはすべてが悪というものではない。こうした図像操作では見る人の楽しみを向上させたり、空想力を高めたりするものがあり、そうしたものは道徳的にも悪というものではない。ただしこれらの場合にはそうした操作が行われているものであることが、見る人も承知していることが前提である。故に問題は、こうした操作が、見る人にわからない形で行われ、見る人を欺くような機能をする場合があることであるが、こうした操作はすべて人間によって意図的に行われるものであるから、そもそも人間がそのような操作をしないよう、少なくとも悪用しないようにすることが肝要な問題となる。

こうしたことは、人間はその行為について善悪の判断を行うことが必要ということを意味する。ただしここでは、人間行為一般についての道徳的判断ではなくて、学問における、あるいは学問の名による価値判断の可否についてだけ論じるものとする。この問題は、20世紀の初頭マックス・ウェーバーにより「学問の名による価値判断否定の命題」として主張されて以来、文系的学問の世界では当然のこととして妥当し、時にはそれが拡大解釈されて、学問世界では没価値判断が常識的なこととして通用してきた。

この問題についての本稿筆者の見解は、随時に提示しているが<sup>3</sup>（例えばΩ1）、最近において実に注目されることは、アクターネットワーク理論、従って（物的性）記号論においてもローにより学問における価値判断の必要性が提起されていることである。

すなわちローは、今日（1995年以降）のアクターネットワーク理論、より適切には物的記号論とよぶべきものの特性的必須要因として、①実際の実践性（performativity; enactment）、②多種多様性（multiplicity）、③流動性・弾力性（fluidity）、④存在論的政治性（ontological politics）とともに、⑤現実と善（realities and goods）を挙げ、現代のアクターネットワーク理論すなわち（物的性）記号論では善悪・正邪（the right and the wrong）の判断を行うものとすることが不可欠であると主張しているのである（L2, pp.15-16; 詳しくはΩ5をみられたい）。

今日においてこの「没価値判断」の命題をいわば悪用し、自らの主張を展開し浸透させるために多用している典型的なものに、ポストモダン（ここではポストモダニティ等と同義）の考え方があられるように思われる。ところが近年、これに対する反論的主張がトランスモダン論（ここではトランスモダニティ等と同義）として世界的に台頭している。

トランスモダン論の主張によれば、ポストモダンの考え方では、人間が（例えば消費者として）好むものならば、すなわち売ることができそうなものならば、どのようなことをしても、また、どのようなものを売ることにしてもよしとされ、かつ推奨されるために、つまり「何でもあり（anything goes）」がスローガンとされるために、自然のおよび社会的な環境の破壊が進行し、このまま進めば、人類は破滅（collective suicide）に追いやられてしまう危険がある（A2, p.201）。

故に今や、こうしたポストモダンの考え方を克服し、それに代わって人間の尊厳ある存在の

確保に志向した考え方が不可欠という主張が全世界的に起き、広まっている。これは一般にトランスモダン論といわれる。ただし現時点ではトランスモダンの主張は多様な姿をなし、それに含まれる所論のなかにはトランスモダンと名乗っていないものもある。というよりは、トランスモダンと名乗っていないものでも、その主旨からいえばトランスモダン論と考えるべきものがある、という状況になっている (A2, p.200)。

この場合、トランスモダン論として位置づけられる基準にも一義的なものがあるのではない。本稿筆者のみるところ、トランスモダン論の根本的な2本柱となっているものは、家父長制の廃絶、従って真の男女同権の確立、ならびに、地球的および社会的な環境の保持にあるとみられるが (詳しくは  $\Omega 2.3$ )、それは一言でいえば、「人間らしい尊厳ある存在の確保」に志向するものである。人間はこうしたものに変わることが求められているのである。故にローの所論にみられるように、価値判断が必須なものとなる。ローの所論は、本稿筆者の見解では、トランスモダン論の一翼を成すと位置づけられうるものである。

こうしたローの所論をいわば一例として、記号論においてもトランスモダン志向的理論が展開されることが望まれる。ところが、記号論の隆盛をポストモダン進展との関連でとらえようとする見解には強いものがある。例えばウルフア (Ulfa, M.) は、2012年の論考の冒頭において「記号論を理解しておくことはポストモダニズムの評価に際し決定的に重要なことである」と述べている (U, p.1)。

またリベイロ (Ribeiro, N. F.) は、直接的にはツーリズム研究についてであるが、2009年、(ツーリズム研究では) 記号論的分析が有用なものであるとしたうえで、これまでのこうした研究は、若干の例外を除いて、批判的 (critical)、ポストモダンのであり、かつポスト植民地主義的 (post-colonial) な観点から行われてきたものであると総括している (R, p.11)。

こうした状況は早急に克服され、記号論でも、ツーリズム研究でも、少なくともポストモダン超克的な立場にたつ研究が推進されることが肝要である。その萌芽はすでにあると思われる。本稿はそれに多少とも貢献しようとするものであるが、本稿筆者としては、現在においてもポストモダンの思考に執着し、その推進に手を貸すようなものは、後の世代により人類のあり方を見誤ったものとして強く糾弾されるであろう、と思料する。

理論趨勢的には、サーダー (Sardar, Z.) が2012年に次のように述べているところを紹介しておきたい。サーダーはイスラム文化の観点から論陣を張っている世界的に著名な論者である。サーダーは「世界の大学では欧米的な学問のみに終始しているが、新しいトランスモダンの時代になれば、イスラムはじめ非欧米的な文化が、欧米的文化と並ぶものとなる。そして今後数十年の間には力の重点は西から東へ移転する。その時欧米中心的な学問は、この急速に転換する現実に対しなんら発言権を有しないものになるであろう」と述べている (S, p.3)。

## 参考文献

- A1: Akrich, M. and Latour, B.(1992), A Summary of a Convenient Vocabulary for the Semiotics of Human and Nonhuman Assemblies, in: Bijker, W.E and Law, J.(eds.), *Shaping Technology/Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, MIT Press, pp.259-264.
- A2: Ateljevic, I.(2013), Visions of Transmodernity: A New Renaissance of our Human History? *Integral Review*, Vol.9, pp.200-219.
- B: Beebe, B.(2004), The Smiotic Analysis of Trademark Law, *UCLA Law Review*, Vol.621, pp.621-704.
- C1: Chandler, D.(last modified October 22, 2014), Semiotics for Beginners, Introduction, pp.1-13, retrieved December 20, 2014, from: <http://visual-memory.co.uk/daniel/documents/S4B/semiotics.html>
- C2: Chandler, D., Semiotics for Beginners, Signs, (邦訳「初心者のための記号論—記号—」, retrieved May, 2015, from: <http://www.wind.sannet.ne.jp/masa-t/kigou.html>, pp.1-19).
- F: Fenk, A.(2008), A View on the Iconic Turn from a Semiotic Perspective, pp.27-42, retrieved December 10, 2014, from: [http://www.uni-klu.ac.at/mk0/personal/bediens.Fenk-iconicturm.pdf](http://www.uni-klu.ac.at/mk0/personal/bediens/Fenk-iconicturm.pdf)
- G1: Garfinkel, H.(1967), *Studies in Ethnomethodology*, New Jersey: Prentice Hall.
- G2: Greimas, A. J.(1966), *Structural Semantics: An Attempt at a Method*, translated, University of Nebraska Press(1983).
- G3: Greimas, A. J. and Courtès, J.(eds.)(1982), *Semiotics and Language :An Analytical Dictionary*, Indiana University Press.
- H: Høstaker, R.(2005), Latour—Semiotics and Science Studies, *Science Studies*, Vol.18, pp. 5-25.
- K1: Katilius-Boydston, M.(1990), The Semiotics of A.J. Greimas: An Introduction; *Lithuanian Quarterly Journal of Arts and Sciences*, Vol.36, retrieved December 20, 2014, from: [http://www.lituanus.org/1990\\_3/90\\_3.htm](http://www.lituanus.org/1990_3/90_3.htm)(pp.1-8)
- K2: Keane, W.(2003), Semiotics and the Social Analysis of Material Things, *Language & Communication*, Vol. 23, pp.409-425.
- L1: Latour, B.(2005), *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*, Oxford University Press.
- L2: Law, J.(2007), Actor Network Theory and Material Semiotics, pp.1-21, retrieved December 20, 2014, from: <http://www.hetogeneities.net/publications/Law2007ANTandMaterialSemiotics.pdf>
- L3: van Leeuwen, T.(2005), *Introducing Social Semiotics*, New York: Routledge.
- L4: Lenoir, T.(1994), Was That Last Turn a Right Turn?: The Semiotic Turn and A. J. Greimas, *Configurations*, Vol.2, pp.119-136.
- M1: MacCannell, D.(1999), *The Tourist: A New Theory of Leisure Class*, University of California Press. (安村克己／須藤廣／高橋雄一郎／堀野正人／遠藤英樹／寺岡伸悟訳 (2012)『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』学文社)
- M2: Martin, B. and Ringham, F.(eds.)(2000), *Dictionary of Semiotics*, London: Cassell.
- M3: Morrisian Behaviorism and Peircean Pragmatism, pp.1-4, retrieved December 20, 2014, from: [http://www.augustponzio.com/files/morrisian-20 behaviorism.pdf](http://www.augustponzio.com/files/morrisian-20%20behaviorism.pdf)
- R: Ribeiro, N.F.(2009), Tourism Representation and Semiotics—Directions for Future Research, pp.1-7, retrieved December 10, 2014, from: <http://recil.grupolusofona.pt/bitstream/handle/10437/1873/570-1997-1-PB.pdf?sequence=1>(pp.7-14).
- S: Sardar, Z.(2012), Transmodern Journeys: Future Studies and Higher Education, pp.1-7, retrieved December 10, 2014, from: <http://ziauddinsardar.com/2013/07/transmodern-journeys-future-studies-and-high-education.pdf>
- U: Ulfa, M.(2012), Semiotics and Postmodernism: The Paradigm of Roland Barthes in Franz Kafka's the Metamorphosis, *Diposkan Oleh MAYA on Jumat*, 27 Januari 2012, pp.1-5, retrieved December 1,



- 2014, <http://letirayamada.blogspot.jp/2012/01/semiotics-and-postmodernism.html>
- Ω1: 大橋昭一 (2014a) 「観光学はどのようなものか」大橋昭一／橋本和也／遠藤英樹／神田孝治編著『観光学ガイドブック—新しい知的領域への旅立ち—』ナカニシヤ出版, 第2章 8-13 頁
- Ω2: 大橋昭一 (2014b) 「トランスモダニティ論の勃興—現在の社会をどうとらえるか: その基本的一類型—」『和歌山大学・経済理論』376号 103-128 頁
- Ω3: 大橋昭一 (2014c) 「ポストモダンからトランスモダンへ—現在社会のとらえ方の転換点—」『和歌山大学・観光学』11号 1-12 頁
- Ω4: 大橋昭一 (2014d) 「今日における協働体のとらえ方—ラトウールのアクターネットワーク理論の研究—」『和歌山大学・経済理論』378号 81-101 頁
- Ω5: 大橋昭一 (2014e) 「アクターネットワーク理論の進展過程—物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に—」『和歌山大学・経済理論』379号 41-62 頁
- Ω6: 大橋昭一 (2015a) 「経済理論の記号論的展開過程—構造主義(古典)的記号論を中心に—」『和歌山大学・経済理論』381号 83-102 頁
- Ω7: 大橋昭一 (2015b) 「ブランド理論の記号論的展開課程—近年における記号論立脚のブランド理論の特色—」『関西大学・商業論集』60巻2号 59-79 頁
- Ω8: 大橋昭一／竹林浩志(2014)「観光事業論におけるアクターネットワーク理論の意義—ポスト・アクターネットワーク理論をふまえて—」『和歌山大学・観光学』12号 15-25 頁

## Development of Theories on the Semiotic Turn: Their Characteristics Related to the Transmodern Paradigm

Shoichi OHASHI

### Abstract

Semiotics—said to include the main aspects of actor-network theory—has come to prominence in recent years, and has diversely developed since the semiotic turn during the 1990s. This paper surveys this process from the semiotic viewpoint, and asserts the necessity of regimenting its theories into the paradigm of transmodernity in order to advance them further.